第３章　研究のまとめ

１．研究のまとめ

各抽出児の事例から読み取った**「幼児の自分づくりの姿」**を必要に応じて教育課程の発達のプロセスの中の「自分づくりのプロセス」[vi]とも照らし合わせながら、幼児の自分づくりの姿を再確認してきた。その中で、幼児の**「自分づくりを支える環境の構成」**と**「自分づくりを支える教師の援助」**を検討し、以下のことが見えてきた。

（１）抽出児のまとめ

各クラス１名の抽出児を一年間追跡観察し事例を収集、考察してきた。それらを「幼児の自分づくりの姿」「自分づくりを支える環境の構成」「自分づくりを支える教師の援助」という３つの視点で振り返り、まとめた。（Ｐ13、Ｐ24、Ｐ35、Ｐ46、Ｐ57 と各抽出児の事例の最後に掲載）

（２）学年のまとめ

（１）により見えてきた「幼児の自分づくりの姿」「自分づくりを支える環境の構成」「自分づくりを支える教師の援助」の特徴を学年ごとにまとめた。

＜３歳児　学年のまとめ＞

○幼児の自分づくりの姿

初めて集団生活をおくる幼児らが自分づくりをするには、何より園の中で安心して過ごせることが大切である。安心して過ごせるようになった幼児らは、自分から周りの環境に目を向け、かかわろうとする。自分以外の人や身近なもの、特に教師とのかかわりをもとに、自分づくりをしていく。

○自分づくりを支える環境の構成

・安心して生活することができる場

自分づくりをするためには、幼児一人一人が安心して過ごすことができる場があることが大切である。心が安定し、安心して過ごせる空間に身を置くことによって、自分以外の人や身近なものとかかわり、自分づくりをすることがわかる。

・興味をもち、かかわりたいと思うもの

初めて家庭から離れて生活する園の中に、幼児が興味をもち、かかわりたいと思うものを提示しておくことが大切である。中でも入園当初は、家庭で触れ親しんできたものやかかわったことがあるものが、家庭と園をつなぎ、幼児らの心の拠り所となったり安心して触れることができるものとなったりする。幼児一人一人の興味や生活経験を踏まえ、環境を構成することが大切である。

○自分づくりを支える教師の援助

・幼児の思いを探り、寄り添う

幼児らは家庭から離れ生活する幼稚園生活に不安や戸惑いを感じている。教師はそんな幼児らの思いを探り、寄り添っていくことが大切である。そうすることによって幼児は教師に親しみ、安心して生活することにつながっていく。

・教師同士、連携をする（ティーム保育）

幼児一人一人が自分のやりたいことを見つけ、集団の中で充実して生活することを願い、教師の役割を明確にすることで、幼児らは自分のペースで教師や遊びの場にかかわることができる。また、教師間で幼児一人一人の姿や今後に向けての願いなどを共通理解することで、教師のかかわりの視点が明確となる。そうすることによって、教師一人一人の幼児らへのアプローチの方法は異なっても、同じ方向を向いて援助していくことができる。このような教師のかかわりが幼児らの自分づくりを促す。

＜４歳児　学年のまとめ＞

○幼児の自分づくりの姿

４歳児は、気の合う友達との関係を築いていく過程で自分づくりを行っている。幼児らは周囲の環境に興味関心をもってかかわる中で、自分の思いを友達に受け入れてもらえなかったり、自分の思い通りにならない状況に出会ったりする。このような経験を繰り返す中で、幼児は自分と友達との違いに気づき、魅力的で憧れる友達や思いを受け入れてくれる友達等に関心をもつ。教師に支えられ、関係を築いていく中で、友達と一緒に遊ぶ楽しさを繰り返し味わい、相手の思いを受け入れて遊ぶ楽しさにも気づいていく。気の合う友達との間で思いがぶつかり合った時などには、教師の援助も受けながら、自分の置かれている状況と折り合いをつけながら行動しようとするようになる。

このように、４歳児にとっては、「気の合う友達と思いを受け入れ合おうとすること」が自分づくりにつながると言える。

○自分づくりを支える環境の構成

・思い通りにならない場

幼児が興味をもって環境にかかわろうとする時、友達といざこざになり、自分の思いが通らないことがある。そのような時に教師が一人一人に応じて支えていくことで、幼児らは悶々とした気持ちに自分なりに折り合いをつけ、再度、かかわっていこうとする。この繰り返しの中で、幼児は自分とは異なる思いや考えをもつ友達の存在に気づいていく。そのためにも幼児にとって思い通りにならない場も必要である。

・気の合う友達の存在

幼児は遊びの発想が面白く魅力的な友達、自分の思いを察し受け入れてくれる友達等に関心をもち、かかわろうとする。その友達と一緒に遊ぶことを繰り返し楽しむ中でお互いに支えたり、思いを受け入れたりする存在となる。このような気の合う友達の存在が、遊びの中で安心して自

分の思いを表現したり、いろいろなことに挑戦したりする支えとなっている。

○自分づくりを支える教師の援助

・思いに共感し、友達とかかわろうとする姿を支える

幼児が自分の思い通りにならず活動の意欲が停滞している時には、その思いに共感し言葉で表していく援助も大切である。教師や友達に分かってもらえた嬉しさが安心感となり、友達とかかわろうとする気持ちになる。このように、教師が幼児の思いに共感し、友達とかかわろうとする姿を支えていくことが、友達とかかわる土台となる。

・仲間として遊びながら、幼児同士をつなぐ

教師も仲間となって、場をつくったり必要なアイテムをつくったりして遊ぶモデルを示し、友達や教師と一緒に遊ぶ楽しさを十分に感じられるようにかかわってきた。その楽しい雰囲気の中で、幼児は自分の思いや考えを表出するようになる。時には、お互いの思いや考えがぶつかり合い、自分の思い通りにならないこともある。教師は、遊びながら友達のいろいろな思いや考えを認めたり広めたりし、幼児同士をつないでいくことが大切である。その繰り返しの中で、幼児は、教師の援助を受けながら自分にとって気の合う友達を見つけ、思いを受け入れ合って遊ぼうとするようになるのである。

＜５歳児　学年のまとめ＞

○幼児の自分づくりの姿

２年保育児、３年保育児どちらの事例においても、一緒に遊んでいた友達、周りで遊びの様子を見ていた友達のみならず、学級の友達、学年の友達など様々な友達の思いや考えを聞き合う場が多くなる。互いの思いや考えを聞き合うことを通して、幼児一人一人が自分の考えを再考し、自分の行動を振り返ることが「他者の思いや考えを受け入れようとする」姿であると考える。２年保育児のＨ児の事例１では、「周囲の様子に構わず、自分の思いにこだわる姿」が見られた。しかし、次第に一緒に遊ぶ友達や周りの友達の思いや考えを聞きながら「友達の思いを受け入れたり、友達に思いを受け入れられたりしながら遊ぶ姿」への変容が見られるようになった。３年保育児のＫ児は、「たたいたり、蹴ったりして自分の思いを通そうとする姿」であったが、学級の友達や学年の友達の思いや考えを聞きながら、友達へのかかわり方を考え直していった。

つまり、５歳児にとって「他者の思いや考えを受け入れようとすること」が自分づくりにつながることが明らかとなった。

○自分づくりを支える環境の構成

・生活上のきまりや遊びのルール

生活上のきまりや遊びのルールは必要に応じて幼児と共につくってきた。きまりやルールのある活動は各々が同じように経験しているため、いざこざになった時に自分の経験をもとに意見をもって話し合いに参加することができた。共通の理解の下に話し合いができたことが、そのきまりやルールと照らし合わせて自分の行動を振り返ったり、それらを学年や学級で改めて確認し理解を深めたりすることができた。生活上のきまりや遊びのルールといった制約の中での活動は、

葛藤しながら自己を抑制しようとする姿に向かうためにも必要であることが分かった。

・自分の思いに共感してくれる友達

K児やH児のように自分の思いを強くもっていたり、自分の思いを無理に通そうとしたりして、いざこざになってしまうことの多い幼児にとって、自分の思いに共感したり自分の遊びや考えを認めたりしてくれる友達の存在はとても重要である。自分の思いに共感してくれることから得られる安心感をもとに、周りの友達の意見を素直に受け止め、落ち着いて自分を省みることにつながった。

・場の状況を踏まえ、公正な意見を言う友達

生活上のきまりや遊びのルールなどに基づいた意見や、遊びの場の状況をよく捉えた意見には分かりやすくしっかりとした根拠があり、説得力がある。友達のそのような意見で客観的な考えを知ったり、きまりやルールを守る友達の姿を知ったりすることは、自分の行動を振り返ることにつながったと思われる。

○自分づくりを支える教師の援助

・思いや考えを聞き合う場を設ける

場の状況やいざこざの内容に応じながら、遊びの中でのいざこざを学年で取りあげたり、当番活動などで生じた問題を学級で取りあげたりして、友達の思いや考えを聞き合う場を設けてきた。自分の思いに対する共感の言葉や、時には行動に対する否定的な言葉など、周りの友達の様々な思いを聞く経験を重ねていくことで、次第にその思いを受け止め、自分の行動について振り返ることにつながったと考える。

（3）全体のまとめ

① 幼児の自分づくりの姿

（1）、（2）および、教育課程の発達のプロセスの中の「自分づくりのプロセス」とも照らし合わせながら、「幼児の自分づくりの姿」について以下のことを再確認した。

3歳児は、教師とのかかわりをもとに**安心して**園生活を過ごす中で自分から周囲の環境に目を向け、かかわっていくようになる。安心して生活しながら**自分以外の人や身近なものとかかわることを通して**それらを知覚していく。その過程の中で自分づくりを行っていく。4歳児になると、園生活の中で興味関心をもった人やものにかかわり、思い通りにならない経験も重ねながら**自分と他者との違いに気づいて**いく。その中で、気の合う友達と出会い一緒に楽しく遊ぶためにかかわり方を考えていく。**気の合う友達に自分の思いを受け入れてもらったり、自分なりに考えてかかわろうとしたりする**中で自分づくりを行っている。5歳児になると、友達と思いや考えを聞き合うことを通して、一人一人が**自分の考えを再考したり、自分の行動を振り返ろうとしたりする**ようになる。いろいろな友達とのかかわりの中で**他者の思いや考えを受け入れようとする**プロセスの中に自分づくりにつながる姿がある。

このように、幼児は**教師**との安心できる関係性をもとに、**気の合う友達**、さらに**学級集団や学年集団**へとかかわりを広げていき、その中で自分づくりを行っていることを再確認した。さらに、今、述べてきた幼児の自分づくりの姿を支えるために以下のことが大切であることが見えてきた。

② 幼児の自分づくりを支える環境の構成と教師の援助

○自分づくりを支える環境の構成

・かかわりを広げていくための教師や友達の存在

３歳児は、安心できる**教師の存在**が欠かせない。教師を拠り所として、自分以外の人や身近なものとかかわることが、自分づくりをする姿につながっていく。４歳児になると、**気の合う友達の存在**が自分づくりを支える環境として大切になってくる。幼児は、自分の思いを察し受け入れてくれる友達がいることで、安心して友達とかかわろうとするようになる。さらに、遊びの発想が面白く魅力的な友達等、自分と異なる友達に関心をもつようになる。その友達と一緒に繰り返し遊びを楽しむ中で、相手の思いを受け入れようとしたり、教師の支えを受けながら自分の思いを抑えてかかわろうとしたりする。５歳児になると、**自分の思いに共感してくれる友達**がいる安心感をもとに、**場の状況を踏まえ公正な意見を言う友達**の客観的な考えを受け止め、周りの友達の意見も素直に受け止め、落ち着いて自分を省み、行動を振り返ることにつながっていった。

幼児は安心感を土台に自分からかかわりを広げ、その中で自分づくりをしていくことが明らかとなった。幼児が安心感をもつには、心の拠り所となる**教師**、自分の思いを受け入れてくれる**気の合う友達**、自分の思いに共感してくれる**学級や学年の友達**というように、教師や友達の存在が自分づくりを支える環境として大切である。

・かかわりを広げていくもの、場

３歳児は、心が安定し、安心して過ごせると感じることで身近なものや人にかかわっていく。**安心できる場・空間、慣れ親しんでいるもの**を幼児一人一人の興味や経験等を踏まえて、構成していくことが大切である。４歳児になると、友達とかかわる中で、**自分の思い通りにならない状況**にも出会う。思い通りにならない経験の積み重ねによって、幼児は自分と異なる他児の存在に気づいていく。５歳児になると、必要に応じて幼児と共につくってきた**生活上のきまりや遊びのルール**が、話し合いの視点を明確にし、幼児が葛藤したり自己を抑制しようとしたりする姿につながっていく。

上に述べたように、幼児の発達に応じてかかわりの広がりを意識した環境の構成が必要になる。まずは、園生活を送る上で**安心できる場や空間、慣れ親しんでいるもの**、そして、他者への気づきにつながる**思い通りにならない経験**、さらに、集団の中での話し合いの土台となる**きまりやルール**等、幼児同士のかかわりを広げるものや場を適切に構成していくことが、幼児の自分づくりを促していく。

○自分づくりを支える教師の援助

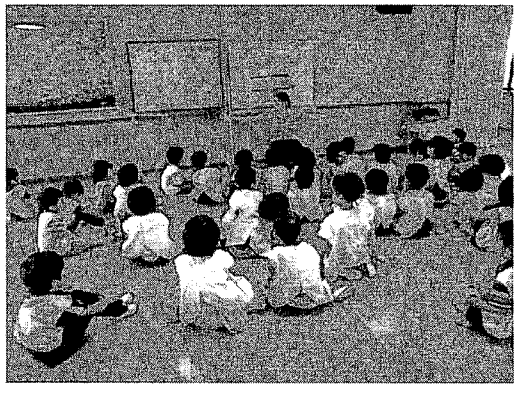
・かかわりを育む（教師から気の合う友達、さらに学級集団や学年の集団へ）

３歳児は、家庭から離れ園生活に不安や戸惑いを感じている幼児もいる。そこで、教師が安心できる拠り所として存在する必要がある。**幼児の思いを探り、寄り添って**いくことで、幼児は教師に親しみ、安心して生活をおくるようになる。その際、**ティーム**を組んだ教師らが**思いや願いを共通理解**しながら幼児にかかわっていくことが重要である。４歳児になると、思いの違いによるいざこざが多くなる。そこで、一人一人の**思いに寄り添い、友達とのかかわりを支えていく**ことが必要である。さらに、遊び仲間の一員として**友達の思いや考えを受け入れながら遊ぶモデルを示す**ことで、幼児らは楽しさを味わい、その中で自分にとって気の合う友達を見つけていく。５歳児になると、**友達の思いや考えを聞き合う場を設ける**援助が大切である。幼児らは自分に対する周りの幼児の様々な思いを聞く経験を重ねていき、次第に友達の思いを受け止め自分の行動を振り返り、自分のかかわりを考える姿につながっていく。

このように、教師との信頼関係を築くことができるように、幼児の安心感を支える援助から、**気の合う友達**、さらに**学級、学年の集団**へと幼児らのかかわりの広がりを意識した援助をすることが大切である。

２．課　題

昨年までの研究の積み重ねで教育課程と指導計画を作成し、今年度は、幼児の自分づくりの姿を再確認し、自分づくりを支える環境の構成、教師の援助について学年の特徴を明らかにしてきた。これらが小学校へどのようにつながっていくか探っていかなければならない。



参考文献

[vi] 金沢大学附属幼稚園・研究紀要第 57 集「自分づくりを支える生活プランの作成」，2011，